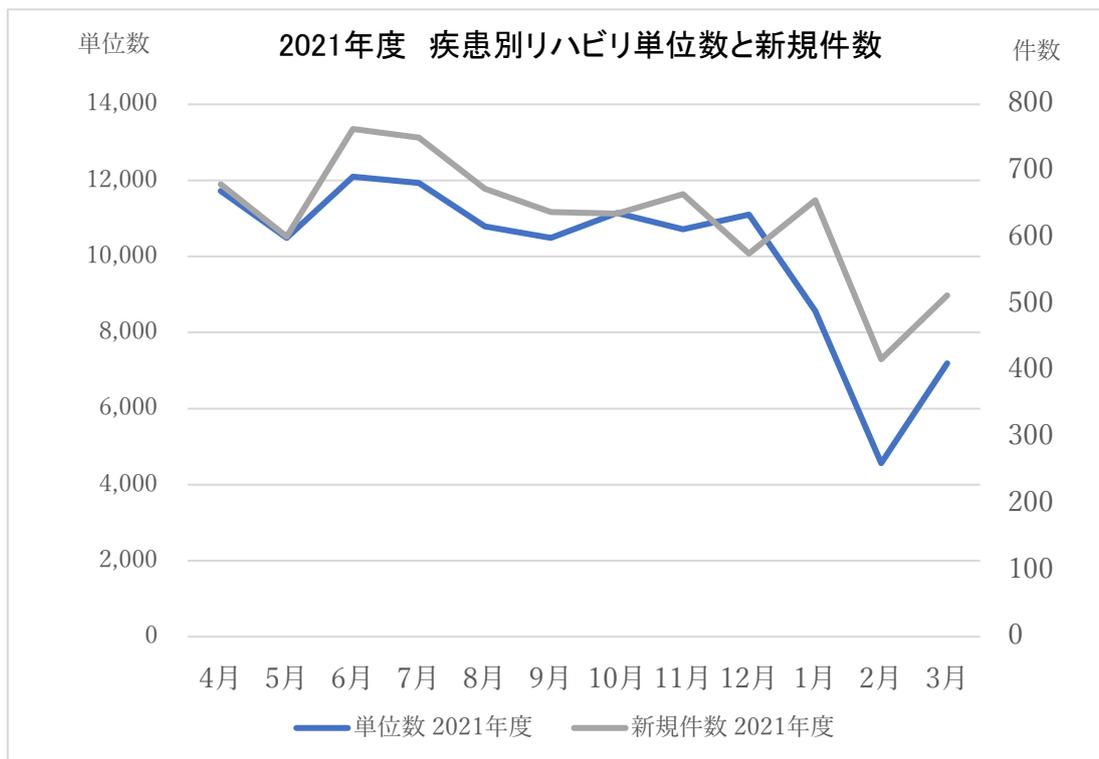


リハビリテーション科

リハビリテーション科は常勤医師1名、非常勤医師1名、理学療法士（PT）26名、作業療法士（OT）9名、言語聴覚士（ST）7名、マッサージ師1名、事務員2名体制でリハビリテーションに従事している。2021年度も昨年度に引き続き新型コロナ感染症の影響が大きかった。

科全体での取得単位数は、10,000～4,500単位と変動が大きかった。新型コロナ感染症に対する緊急事態宣言、入院患者数の減少、リハ対象者数の減少、提供リハ実施単位数の制限、リハスタッフの感染や濃厚接触者としての就業規制などが関与している。



<理学療法部門>

【中枢チーム】

中枢チームはPT6-7名（内ローテーター 2-3名）にて主に脳神経外科、脳神経内科の診療にあたった。対象疾患は脳卒中、脳腫瘍、頭部外傷、脊椎疾患の保存療法や手術療法に対する術前後の介入、パーキンソン病やパーキンソン症候群、ギランバレー症候群、肺炎、髄膜炎、神経難病などに対するリハビリテーションをPT・OT・STにて連携をとりながら提供した。4月より第2・4土曜日のSCU専任理学療法士の出勤を開始し、SCU患者に対し週6日のリハビリテーションを提供すると共に、看護師と介助方法や転帰に向けた問題点を共有し、早期退院を目指した介入を継続できている。脳外科病棟にて週末に行っているリハビリカンファレンスは、病棟スタッフ・リハスタッフ共に積極的に意見交換が行えるようになり、運動面だけでなく高次脳機能障害やADL障害に対しての介入を病棟と連携し継続できている。

2020年度に開始した脳神経内科病棟スタッフとのリハビリカンファレンスでは、前年度と比較し対象患

者は増加した。運動機能や介助方法、社会的情報などを共有し適切な介入を行えるようにしている。2020年度と同様、院内の感染対策に則り、対面でのチームカンファレンスや実技練習が行えない時期は、紙面でのカンファレンスやオンラインでの勉強会を行う事で教育・研鑽の機会が減少しないよう努めた。

【内部チーム】

内科系では呼吸器・循環器・消化器・腎臓・血液内科を中心に、その他幅広い科から、廃用症候群の予防や改善を主な目的とした理学療法を実施した。コロナ病棟に関してはリモートでの介入を行い、入院中の身体機能維持に努めた。外科系では、消化器・呼吸器・心臓血管外科を中心に術前介入、ICUからの術後早期介入を実施した。離床難渋症例に関しては他職種とのカンファレンスを開催し、ADL低下予防に努めた。また、自宅退院前の情報共有を目的とした退院前カンファレンスを実施し、退院後も安全に生活を送られるよう取り組んだ。心不全教室や腎臓病教室では、昨年度に引き続き、再発予防を目的とした多職種での患者教育に携わった。訪問チームと密に連携を取り、入院から退院後までリハビリテーションを提供できる体制を構築した。教育に関しては、サポートを行いながら学会発表や研修参加など、各々興味のある分野を追求できるよう指導した。科内での1回/週のケースカンファレンスでは、様々な視点からアドバイスし、臨床に活かせるよう取り組んだ。

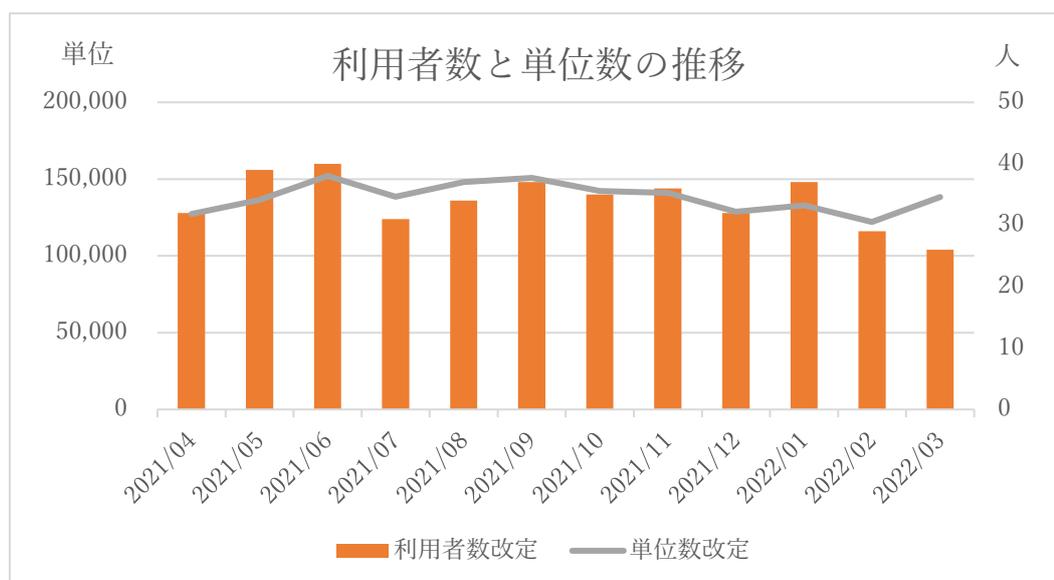
【整形チーム】

PT4-5名・マッサージ師1名にて、脊椎疾患(頸椎・胸椎・腰椎)、関節外科(人工膝関節全置換術、人工股関節全置換術)、各種外傷(脊椎・上肢・下肢の骨折など)、転移性骨腫瘍を主な対象とし、発症/手術直後より障害の機能改善、生活の質の向上を目標にリハビリテーションを実施した。地域との連携を深め、当院訪問リハビリテーションチームや他院での外来リハビリテーション・回復期リハビリテーション病院へ早期に移行できるように情報共有を行った。整形外科医や病棟との連携においては、昨年度に引き続き整形外科医とのケースカンファレンスや看護師との週末リハビリテーションカンファレンスにて情報共有を行いシームレスな関係を築いている。また、最新の知見ならびに科学的な根拠に基づいた治療を提供できるよう各種研修会への参加や整形外科関連学会への演題発表にも取り組んだ。

【訪問チーム】

訪問チームはPT3名、OT1名、ST1名在籍し活動している。1月あたりの平均利用者数は33名(前年+10名)。1月あたりの平均単位数は134,729単位(前年95,928単位)であった(図1参照)。疾患内訳は呼吸器30%、循環器35%、がん関連15%、脳神経10%、整形外科5%、その他5%であった。退院後の訪問リハビリテーション(訪問リハ)開始までは平均3.0日であった。コロナ禍においても感染対策を実施しながら、退院後の自宅生活を安心して継続いただけるように、訪問リハを実施した。当院訪問リハ終了後には地域の周辺事業所と連携を積極的に行い、利用者のニーズに合わせ日常生活動作能力の維持・改善ができるように地域の各関連職種へ引き継ぎを行ってきた。学術・教育活動においては若手スタッフの症例報告や訪問リハ利用者の退院後の生活状況について関連学会などへ発表し、院内スタッフの教育や啓蒙活動だけでなく院外地域に対し当院訪問リハの取り組みを発信した。また昨年度に引き続き、地域活動として北区地域包括支援センターなどへ介護予防を目的とした自立支援会議をはじめ、地域活動へも積極的に参加している。

(図1 利用者数と単位数)



<作業療法部門>

作業療法は、人の行う様々な作業（日常の活動）を用いてセルフケア・生産活動・余暇活動の回復を目的としている。当院では、脳神経外科・神経内科をはじめ、整形外科・リウマチ膠原病科・癌など幅広い疾患を対象に作業療法を実施している。病棟でも自主リハビリやADLの向上を図れるよう、昨年度に引き続き看護師など他職種へのリハビリ進行具合の報告や自主訓練指導などを行い連携強化している。コロナ感染対策の観点でOT介入を行えない病棟においては、病棟看護師へ指導書を用いて自主リハビリの実施と確認を依頼し、入院中の身体機能維持に努めている。訪問リハビリでは自宅内での日常生活活動の支援を行っている。またOTチームでのカンファレンスや勉強会を開くことで、新人指導を重点的に行えるよう配慮し、科内におけるスキルアップにも努めている。

<言語療法部門>

言語療法ではST5名が在籍している。脳神経外科、脳神経内科を中心に高次脳機能障害、失語症、構音障害、音声障害などのコミュニケーション障害や摂食・嚥下障害に対してのリハビリテーションを実施している。2020年度より呼吸器疾患算定可能となり言語療法の処方が増加している。呼吸器・循環器・消化器を中心に幅広い科からのオーダーに対応している。嚥下造影検査、嚥下内視鏡検査（耳鼻咽喉科での実施）での他覚的評価を行い、安全に嚥下訓練を進められる環境を整えている。コロナ禍の為、感染対策を行いながらの摂食嚥下訓練を病棟と協力しながら進めている。成人だけでなく小児分野でも活動しており哺乳を含めた嚥下評価、発達状況に応じてリハビリテーションを実施している。訪問リハビリ分野では、院内と訪問業務の兼任で活動しており、入院から地域につなげた介入を行っている。臨床業務に加えてNST、口腔嚥下リハビリテーションチームにも所属し多職種との活動や病棟に対して摂食嚥下障害の勉強会開催にも取り組んでいる。